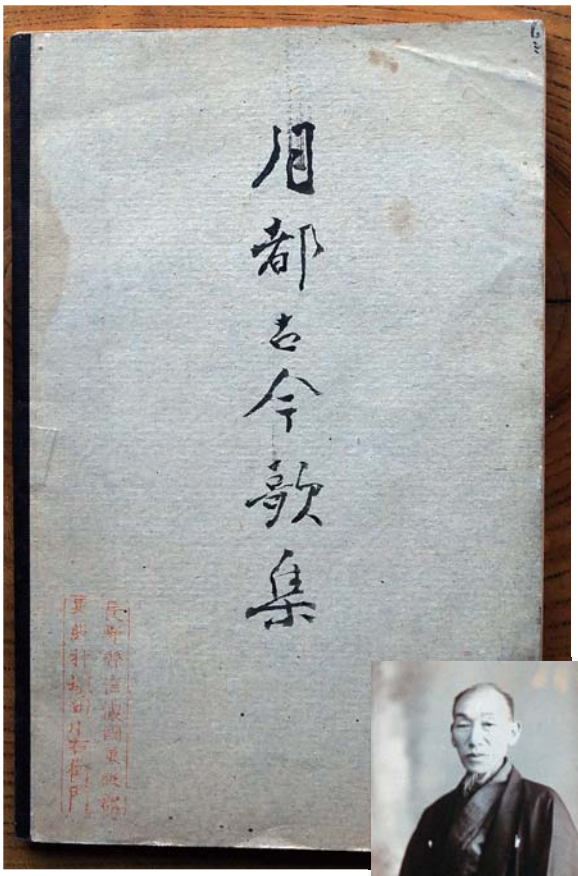
# さらしなの里

## 友の会だより

第４３号　　２０２０・秋



## 「月の都」で地域をＰＲした更級村初代村長

千曲市が6月19日、「月の都」として日本遺産に認定されました。地域の文化財や文化財に値するものをキーワードでつなげ、観光客を呼び込んでもらおうと文化庁が始めた事業です。千曲市には国の重要文化的景観の「姨捨の棚田」がありますが、これだけだと周辺の観光資源に人がなかなか流れません。それで千曲市は月の都という新たなキーワードを作ったのですが、月の都による地域ＰＲは、明治時代に更級村が行っていました。主導したのは初代村長の塚田小右衛門（雅丈）さんです。

小右衛門さんは冠着山が古代から姨捨山と呼ばれて来た山であることを証明し、世間に認めさせた人です（本誌16号参照）。その麓の空間を「月の都」と見立て、自作の和歌に意欲的に詠み込み、「月の都」と書かれた提灯を自宅に掲げて著名人を招いては「月の都」の和歌をいくつも詠んでもらっています。そのことは「姨捨山の文学」（矢羽勝幸著）などで知ってはいたのですが、小右衛門さんのご子孫塚田せつ子さんから、小右衛門さんが作った和歌集（上の写真）を見せていただき、さらに多くのことが分かってきました。

縦20チセン、横13チセン、80ページの小ぶりの大学ノートに、さらしなにまつわる古今の歌を筆記。表紙には「古今姨捨山詩歌集」、裏には「月都古今歌集」と書かれ、冠着山の麓が月の都であることを強烈に誇る内容です。今号の4ページではこの和歌集から見えてくる小右衛門さんと「月の都」の関係を紹介します。（芝原区・大谷善邦）

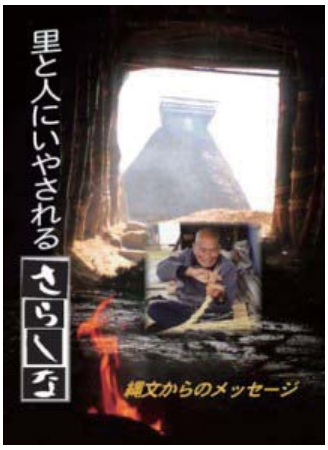
# 縄文まつりの原点 込められた思い

新型コロナウイルスへの警戒から、今年のさらしなの里縄文まつりは中止になりました。まつりの原点などを振り返ってみる機会かとも思い、第15回の2007年に縄文まつり実行委員会で作った本「里と人にいやされるさらしな縄文からのメッセージ」をあらためて紹介します。テーマの設定から原稿執筆、写真撮影、地図・図解・イラストの制作、レイアウトまで地域住民の手作り（印刷製本は業者）で、四六判カラー、160ページという本格的な単行本です。

「さらしなの里」の地名に寄せられてきたあこがれの解説から始まり、冠着山を崇拝した縄文人とその集落遺跡、まつりの運営主体であるさらしなの里友の会や縄文まつりの体験コーナーの紹介と続きます。後半には、地元の更級小学校が運動会と同じように縄文まつり参加を学校行事に組み込んだ経緯と子どもたちの感想などをたっぷり書き込んでいます。縄文まつりが更級地区で盛んになった理由の分析もあります。

本の制作から13年。さらしなの里友の会のメンバーは年を重ねました。一方で最初に学校行事として参加した高学年の子どもたちは社会人になり、各方面で頑張っているでしょう。まつりの運営を担う若手の参加が待たれています。

左に掲げたのは、縄文まつり草創期に尽力したお三方（故人）の言葉。本のトップページに載せてあるものです。在庫がまだあります。さらしなの里歴史資料館で1000円で販売しています。




こんないい環境の中でまつりでもやろうじゃないか。みんなが参加できるような　（さらしなの里友の会初代会長・大谷秀志さん）

それはひと言、ありがとう、って言えばいいだねえかい（高島哲夫さん）

手間と物を惜しまないのが友の会だ　（塚田哲男さん）

---

リレー 里麗エッセイ

## さらしなの里歴史資料館と私

千曲市新田　中澤英治

更級の方ならだれでも知っている資料館である。毎年、友の会・地域の方々・資料館事務局が協力して「縄文まつり」（今年は中止）を実施しておられる。素晴らしいまつりであり、現在、更級小学校は、学校を上げてこの行事に参加していると聞く。

私は25年ほど前、更級小学校に勤務していたので、この資料館で多くを学ばせていただいた。当時は古代体験クラブ員のみが「まつり」にかかわり、担当の私も「豊穣儀礼」等に参加した。子どもたちと縄文太鼓とリコーダーで自作の曲を奉納したのを特に懐かしく思い出す。音楽の素養などない私に「曲作りも発表（奉納）もしてください」ときっぱりと言った翠川学芸員の厳しくもやさしい人柄が私を動かした。

また、年間10回のクラブ活動では、子どもたちと資料館に出向き、縄文土器・勾玉・やじり作り、火起こし、野焼き等の体験をした。圧巻は、縄文広場での宿泊体験である。あの頃はクラブ活動の一環として認められていたのだ。自力で火を起こし、イワナを石ナイフでさばき塩焼きにした。鱒を菜っ葉で包んで蒸し焼きにもした。それらの美味しさを上回るものに、私は未だに出会っていない。1時間以上かけてやっと起こした火で調理したからこその味なのだろう。自力での価値を知っている翠川さんは決して手伝ってくれなかった。また、この機会に翠川さんは講師として森嶋稔先生を招いてくださり、お話を聞く貴重な体験ができた。皆さん知っての通り森嶋先生は資料館設立にかかわった中心的な方である。

現在、私は森将軍塚古墳館に勤務している。森嶋先生は古墳館設立・古墳復原にも大きくかかわっておられた方だ。そこで働くことができ大変うれしく思う。翠川学芸員、森嶋先生の足元にも及ばないが、歴史から学ぶことを多くの方々に伝えていけたらと思う。

# 親子で“信濃の国”ダンス

## コロナ禍の更級小運動会

新型コロナウイルス感染症は、学校にも大きな影を落としています。新年度も、4日間の登校のみで再び臨時休業となってしまいました。新型コロナウイルスと付き合いながら子どもたちの学びをどう保障していくか、先生方と知恵を出し合い、試行錯誤を重ねる日々です。

5月下旬の学校再開にあたり、豊かな体験と地域とのつながりは子どもたちにとって大切な学びであるとの思いから、1学期には自粛をした学校行事を、2学期には「新しい生活様式」を背景に感染防止対策を講じて、できる限り実施したいと考えました。その中で「縄文まつり」がやむなく中止となったことを受け、規模は小さくなっても運動会を行うことがコロナに負けずにたくましく進むメッセージと、子どもたちの元気が地域の活力になると考え、9月に運動会を実施することとしました。

運動会に向けて、感染防止対策を講じた競技方法など検討を重ね、実施種目が決まっていきました。身体接触があって密になるということで、本校のシンボルでもある騎馬戦をプログラムから外さざる得ないことは大変残念でした。しかし、運動会の実施を決めた多くの学校が児童種目のみとした中で、PTAの種目として行う保護者と児童による全校ダンス「信濃の国」を取りやめることには逡巡し、役員の皆さん、先生方の意見をお聞きする中で強い願いを受けて実施種目に入れることになりました。

更級小学校校歌が「信濃の国」をつくった浅井洌（きよし）氏の作詞であることは、多くの卒業生を経て母校とふるさと更級への思いを伝えるものへと昇華されているように感じます。その思いと誇りが運動会に残されたのが、「信濃の国」の踊りだと想像しました。大正時代末の運動会ではすでに踊りが行われており、昭和30年代からはPTAが熱心に取り組み始めたそうです。数年前からは、親子で参加する全校ダンス「信濃の国」となりました。また、信濃の国を踊る学校は県下に他あれどもアレンジが進み、正調踊りが守り継がれているのは本校だけとも聞きます。

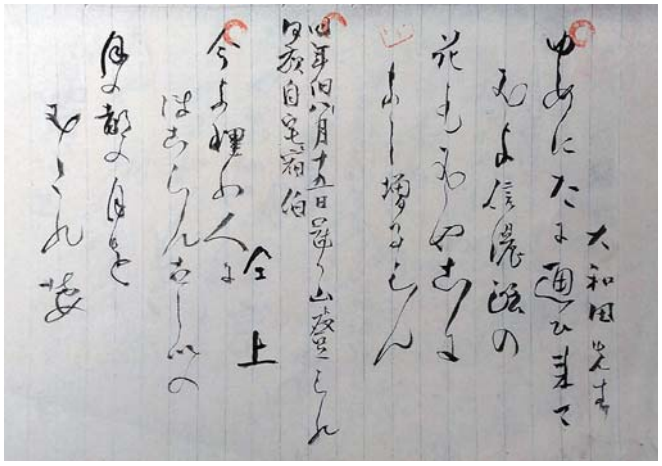
例年と同じく運動会を締めくくる「信濃の国」、大切に守りつながれてきた踊りと思いは、コロナに負けず今年も繋がれました。後日、保護者の方から寄せられた感想から、運動会ができて良かった、「信濃の国」が踊れて本当に良かったと実感いたしました。

（更級小学校長　畑 秀幸）

# 今よりは人に誇らんいにしへの月の都の月を見つれば

## 大和田建樹（「鉄道唱歌」作詞者）

さらしなの里に現われる月が特別に美しいことは昔から都の人たちに知られていました。そのことが分かる一番の史料は和歌で、さらしなのことが詠みこまれた和歌を調べてきました。それで分かったのは、さらしなを「月の都」と見立てる和歌は明治時代に目立つようになり、同時に俳句にも詠まれるようになったということで、そのきっかけをつくったのが更級村初代村長の塚田小右衛門さんだということです。



明治22年、小右衛門さんが主導して冠着山の麓の羽尾、須坂、若宮の3村をまとめ、新しい村の名が更級村と決まるのですが、そのころに詠んだ和歌が次です。

**君が代に月の都と言ふべきはこの更級の姨捨の山**

これは信濃毎日新聞に投稿して載った歌で、明治天皇が統べる日本の「月の都」はさらしなの里という強烈な自負を感じさせます。ご子孫の塚田せつ子さんに見せていただいた「月都古今歌集」には、さらに次の歌があります。

**久方の月の都は信濃なる冠着山の峯にこそあれ**

昔から「月の都」と言われてきた地は、冠着山の峰にあるという、力強い宣言です。

政治的な主張が込められた歌です。当時は歌を詠むことが文化人から政治家まで有力者の大事な教養でした。小右衛門さんは当時開湯した戸倉上山田温泉に著名人が東京などから訪れるようになっていたこともあり、多くの人を自宅に招き、さらしなが月の都だと紹介しました。「汽笛一声新橋を…」で知られる「鉄道唱歌」の作詞者大和田建樹（おおわだたてき）さんもその一人で、滞在して次の歌を作りました。これも月都古今歌集に載っています。

**今よりは人に誇らんいにしへの月の都の月を見つれば**　（上の写真左）

大和田さんは東京に戻り、知人友人に月の都としてのさらしなのことを語ったでしょう。左上に小右衛門さんの熱意に意気投合した人たちの歌の一部を載せました。

これまでの調べだと、さらしなを月の都という言葉と一緒に詠んだ最初は、平安末期から鎌倉初期を生きて「百人一首」を考案した藤原定家（ふじわらのていか）です。その歌は

**はるかなる月の都に契（ちぎ）りありて秋の夜あかすさらしなの里**

月都古今歌集にはこの歌も載っており、小右衛門さんは定家のこの歌に刺激を受け、さらしなの里を「月の都」というキーワードで売り出すと思いついた可能性もあります。

（大谷善邦）

君が代に月の都と言ふべきはこの更級の姨捨の山　塚田小右衛門
久方の月の都は信濃なる冠着山の峯にこそあれ　塚田小右衛門
今よりは人に誇らんいにしへの月の都の月を見つれば　大和田建樹
久方の月の都を人とはば雲の上なる冠着の山　佐藤寛
更級の月の都に来てみれば名にも勝るとなほ思ひけむ　交野時萬
いにしえの月の都を人とはば雲井にちかき姨捨の山　大島浮名
この舟をあがれば月の都かな　水野竜孫

編集後記　月の名所は全国にありますが「月の都」を自ら名乗り、よその人も認めている地はなかなかありません。日本遺産が一時的な話題で終わらないよう新たな発想で磨き直す必要があります。さらしなの縄文人は月をどのように見ていたか。

編集・発行 さらしなの里友の会だより編集委員会（事務局・さらしなの里歴史資料館）〒389-0812　長野県千曲市羽尾 247 の 1